公共政策フォーラム2022 in 南伊勢　政策提言

南伊勢レイディシップ Ladyship

-女性が創出する南伊勢の未来-

慶應義塾大学　総合政策学部　篠原研究会(担当教員：篠原舟吾)

代表者

市川　裕也

発表者

幸地　南海　　市川　裕也　　陳　柔妍

参加者

工藤　長閑　　谷本　結音　　佐々木菜緒　柴垣　貴也

梗概

南伊勢町-三重県南部に位置するリアス式海岸が美しいこの町は、高齢化・人口減少が進む日本の将来像の縮図でもある。人口比率や就業率、産業構成などの事前の調査から、私たちは「南伊勢町の産業の活性化」には女性の活躍がカギを握るのではないかと仮説を立てた。仮説に基づき7つの産業分野にまたがる17名の町民に、各産業の現状と女性の役割についてインタビューを実施した。インタビューの内容分析から、人口減少・価値観・女性の活躍・対外という南伊勢町の現状を形作る4つの特徴を見いだすことができた。その背景にあるのは、属性が異なる人々の交流の少なさである。世代間、地域間、町外との交流の不足が、南伊勢町のコミュニティを硬直化させ、女性や若い世代の積極的な活動を阻んでいると分析した。こうした「しがらみ」を解消し、南伊勢町のコミュニティを女性が活躍する場に変革していくことが、南伊勢町の産業の活性化の第一歩になると私たちは考えた。そこで提案するのが、「南伊勢レイディシップ Ladyship」である。本提言は、クチコミなどを活用した情報の流通とコミュニティの充実を図り、町内のネットワークを改善することで南伊勢町に存在する「しがらみ」を解きほぐすことを目的とする。具体的には、一定の研修を受け、情報発信能力を得た女性を町が「南伊勢レイディ」として認定する。南伊勢レイディは口コミなどによる情報流通と町民との交流、つまりネットワークの形成を行う。積極的に活動する南伊勢レイディの存在は、町に少しでも貢献したいと思う女性を後押しするだろう。本提言は、町内の価値観交流とロールモデルの提供を通じて、女性が活躍する場を南伊勢に創出するものである。「南伊勢レイディシップ」が地域の人々を活性化し、南伊勢の人々が守りたいと願い、私たちも残したいと感じた南伊勢の美しい自然や伝統、文化を未来に伝えていく一助となることを期待する。

はじめに

南伊勢町は、総人口数11402人（うち男性46.7%、女性53.3%）（令和2年度国勢調査）の海沿いの町である。人口減少率14.15%（令和2年度国勢調査）と県内ワーストであり、人口減少、人口流出、超高齢化などの課題を抱えており、それに伴って町全体の産業における事業継承にも滞りが出ている。また、平成27年度の厚生労働省の調査によると、南伊勢町における就業率は男性56.4%、女性35.9%であり、全国就業率の男性62.6%、女性45.4%と比較すると低いことがわかる（平成27年度国勢調査）。これらのデータから、南伊勢町の産業活性化には更なる女性の活躍が必要になると仮定した。

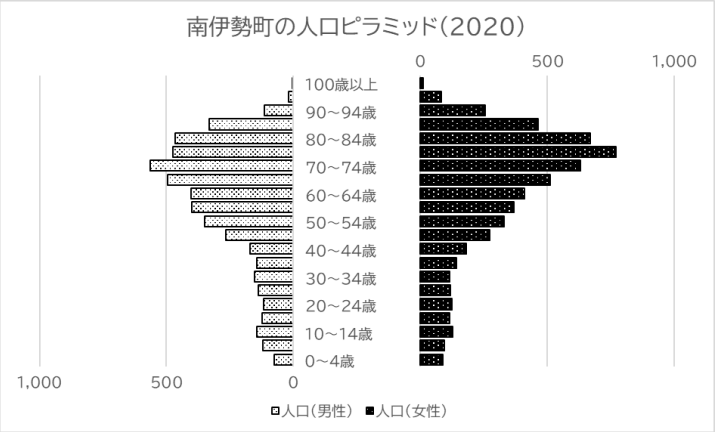

図1. 南伊勢町の人口ピラミッド[i]

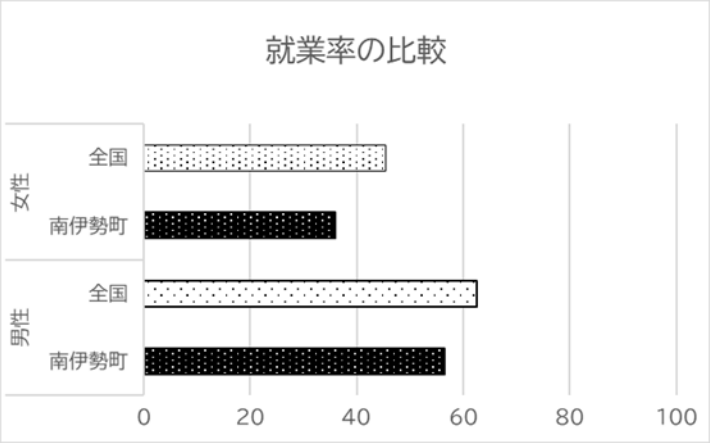

図2. 南伊勢町と全国の就業率比較[ii]

南伊勢町についての事前調査と現地でのインタビュー調査を踏まえ、南伊勢町の抱える課題のうち特に若い女性の流出に着目した。子供を産む女性が地方からいなくなってしまうことで、少子化が進行するのは明らかである。そのため、その地域で子供を産んだ後も住み続けたいと思ってもらえる場所を目指すことが、南伊勢町の課題解決につながると考えた。現在の南伊勢町は、子育て支援や女性副町長、女性議員の誕生など女性の社会進出を促す風潮が確立され始めている段階である。また、インタビューなどのフ

ィールドワークを通じて、南伊勢町には地域特有の慣習やコミュニティの在り方があり、それらの概念が世代間や地域間の不調和につながっている可能性があると感じた。一方で実際に南伊勢町を訪れてみて、自然豊かで落ち着ける空気感や、少しすれ違っただけでも挨拶などのコミュニケーションから温かさが伝わってくる町民の方々に魅力を感じた。何より、町民の方が「守りたい」と考えるもの、そして少しでもよい未来を作るために夢や希望を語る町民の方に触れたことで、全く新しいものを提案するのではなく、南伊勢町が持つ豊かな資源やコミュニティ独自の雰囲気を活用し、課題解決に向けた提案を行いたいと考えた。私たちは、インタビューの内容分析を通じて、南伊勢町の課題を4つ（人口減少、女性の活躍、価値観、対外関係）抽出した。そして、その背景として町内の情報流通と硬直化したコミュニティがあると考えた。若い女性に住み続けてもらえる南伊勢町を目指す上で、南伊勢町にも残る伝統的な性別役割分業観や我が国全体での女性活躍推進策についても検討した。

性別役割分業はいつから日本の社会構造の根幹たる概念になったのか。「男は外、女は内」という概念から妻のことを“家内”と呼ぶようになったのは有名な説だが、このような家庭の形はいつから日本のスタンダードとされてきたのか。古来、日本では女性と男性は平等に労働活動に従事し、卑弥呼の時代より女性がコミュニティをまとめるのは珍しいことではなかったことが歴史的書物や遺跡からわかっている。日本の歴史上、社会における男女の役割がこれほど明確に分断されたのは意外にも明治維新以降のことである。大日本帝国憲法下では男尊女卑が法律で正当化され、女性の自由に労働に従事する権利が剥奪された。つまり、女性が性別役割分業のもと自由な労働から遠ざけられる状況は、日本の伝統的な慣習ではなく、近代になって生まれた新しい固定概念である。そして、現代では今一度女性と男性の平等性を重視し、社会全体が従来の性別役割分業をサポートしつつ、女性の社会進出を後押ししている(国立民俗歴史博物館 2021)。

こうした多様な背景を踏まえ、私たちは「南伊勢レイディシップ Ladyship」を提言する。これは、一定の研修を受けた町の現役世代の女性を「南伊勢レイディ」に任命し、南伊勢レイディによるクチコミや町民との交流を通じて町の政策や町内での先進的取り組み、外部からの情報を町民に伝えるものである。南伊勢レイディシップを通じて、町内のコミュニティに対する概念について、町内に起きていること、町外で起きていることについての情報に町民が触れることで、産業における女性の役割について現代の風潮や社会の流れを南伊勢町の概念と比較し、取り込むことにより女性の社会進出を促進させる。コミュニティ内での情報共有を行うことで、女性が働きやすい労働環境に関するロールモデルの拡散などを踏まえて働きたい女性を後押しし、その活動を広げていく。このようにして特に女性をエンパワーメントするネットワークを作ることが、南伊勢町の産業活性化につながる。

[i] 統計ダッシュボード（https://dashboard.e-stat.go.jp/）をもとに作成

[ii] 三重県戦略企画部統計課.「2019 統計でみる三重のすがた」より加工して作成

Ⅰ.分析手法

本研究では、南伊勢町を女性がより活躍しやすい環境にするためにどういった変化が必要なのかを考えるため、探索的な研究手法を採用した。この手法を用いることにより、できるだけ南伊勢町特有の状況をもれなく把握し、より広い視野を持って「南伊勢町の活性化」について考えようと試みた。具体的には、まず町外からも入手可能な南伊勢町に関する情報（南伊勢町が公表している町に関するデータや統計など）を集め、南伊勢町の現状及び町が直面する大きな課題を肌感覚で理解することを試みた。しかし、データを分析するだけでは南伊勢町を知ることはできない。さらに理解を掘り下げるため、私たちは町の主要産業に注目し、それらを熟知していると思われる方々に対して各1時間程度のインタビューを行った。

産業カテゴリ	インタビュー対象者
行政	役場職員（5名）
立法	町議会議員（1名）
農業	伊勢農業協同組合職員（2名）
漁業	伊勢外湾漁業協同組合職員（2名）
商業等	南伊勢町商工会（3名）
教育	教師等（3名）
観光	宿泊施設（1名）

表1.インタビュー対象者一覧

私たちは、現地で以上７つのインタビューをそれぞれにつき質問票を事前に準備した上で行った。インタビュー手法には半構造化インタビューを用いた。これにより、質問内容を研究テーマに沿った形で一貫性を維持しつつも、インタビュー対象者により自由に話してもらうことを試みた。この柔軟性を保つことにより、想定外の有用な情報にも触れることができるようにした。

インタビューは全て録音し、終了後に文字起こしを行った。そして、文字起こしを基にオープンコーディングという分析手法を用いて、重要だと思われる内容を抽出した。オープンコーディングの作業は、各インタビューにつき一人が担当したため、それらをゼミのメンバーが相互に確認し合い、各分析の信頼性を確保した。抽出した内容から南伊勢町の現状や課題、将来の可能性などをツリーチャートという形で構造的に可視化した。最終的に、それぞれのツリーチャートの共通項を統合し、一つのツリーチャートにまとめた。以下がその図である。

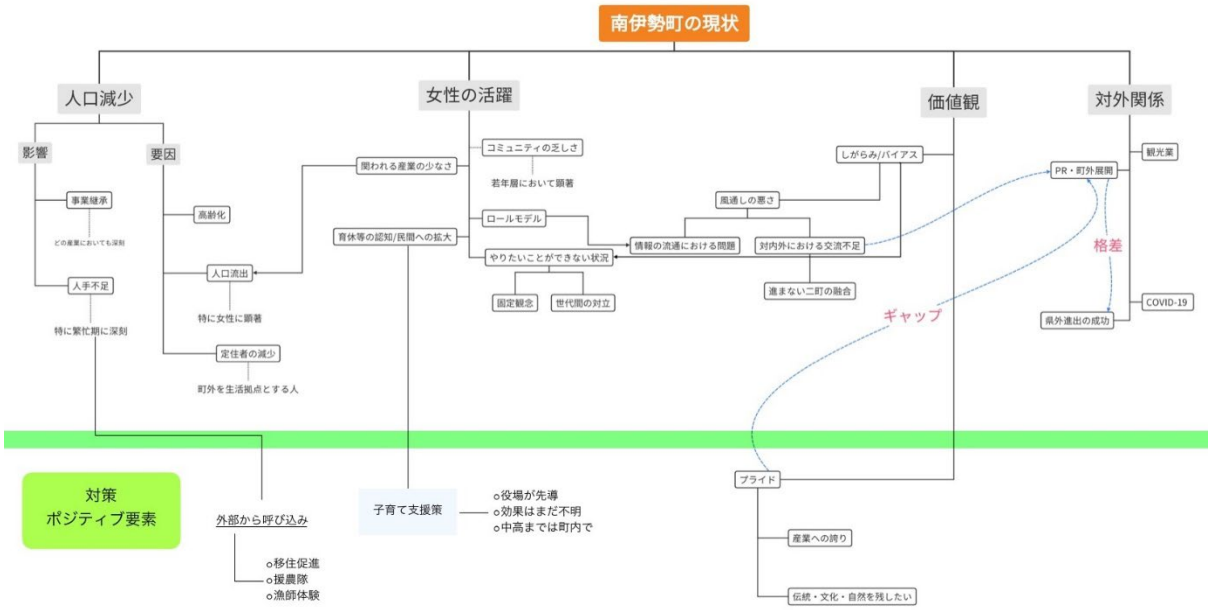
南伊勢町の現状
人口減少
女性の活躍
価値観
対外関係
影響
要因
事業継承
どの産業においても深刻
人手不足
特に繁忙期に深刻
高齢化
人口流出
特に女性に顕著
定住者の減少
町外を生活拠点とする人
関われる産業の少なさ
育休等の認知/民間への拡大
コミュニティの乏しさ
若年層において顕著
ロールモデル
やりたいことができない状況
固定観念
世代間の対立
情報の流通における問題
風通しの悪さ
しがらみ/バイアス
対内外における交流不足
進まない二町の融合
ギャップ
プライド
産業への誇り
伝統・文化・自然を残したい
観光業
PR・町外展開
格差
県外進出の成功
COVID-19
対策
ポジティブ要素
外部から呼び込み
移住促進
援農隊
漁師体験
子育て支援策
役場が先導
効果はまだ不明
中高までは町内で

図3. ツリーチャート

Ⅱ.分析結果

1.課題の特定

全てのインタビュー対象者が何らかの形で言及していたように、人口減少は南伊勢町の最大の課題である。人口の自然減は全国共通の課題であるが、南伊勢町で特に深刻なのは人口の社会減、すなわち町外への転出である。その背景としては、女性が従事できる産業が少ない（特に第三次産業の選択肢が乏しい）こと、また若年層にとって居心地の良いコミュニティが乏しいことが挙げられる。人口減少は、各産業の後継者問題や、人手不足による産業の縮退（特に繁忙期に多くの人手を要する農業等で顕著である）、またコミュニティの縮小・活動低下の根底の要因となっている。対策として、移住定住の促進や援農隊等による外部からの人の呼び込み、子育て支援策などが行われている。

南伊勢町民の「価値観」も現状に大きな影響を与えている。ポジティブな側面としては、町へのプライドの高さがある。農産物や水産物の質の高さ、豊かな自然、あるいは歴史や伝統（野口雨情の「五ヶ所小唄」や愛洲氏）への誇りとそれらを守り残す意思の強さはインタビューから強く窺えた。一方で、南伊勢町にある固定観念は「しがらみ」として世代間対立を生み、女性の積極的な社会進出を阻むなど産業の活性化を停滞させている。若年層や女性が「やりたいことができない」「そもそもやりたいと思えない」状況になっているのだ。実際、インタビューから高齢世代の反対のため若い世代がやろうとしたことがうまく進まなかった例、また責任ある立場を務めることをそもそも想定しない女性の例等があることがわかった。「しがらみ」の背景には、世代間、地域間、町外との交流の不足により、町内の風通しが悪くなっており、新たな価値観が浸透しにくくなっていることがある。

女性の活躍の観点では、現状の南伊勢町は現役世代の女性が活躍しにくい環境である。南伊勢町では、子育て支援策を積極的に展開しているが、直近の取組が多いこともありその成果はまだ見えていない。また、役場においては育児休暇などの導入が積極的に行われているが、民間事業者においても十分な意識づけがなされているとは言い難い。なお、こうした子育て支援の制度に関する情報はクチコミで広がっているのが一つの特徴である。

最後の対外関係については、町内でも大きな格差が発生しているのが特徴である。積極的に県外への売り込みを図り、大手百貨店に食材を卸すことに成功した経営者や、直販により農産物を販売する農家もある。外部の人とともにSDGsに関する勉強会を開催する等、積極的に町外と交流を図る団体も存在する。一方で、「自信がない」等の理由で対外展開や外部との交流に消極的な人もいるのも事実である。

各インタビューの共通項を統合して南伊勢町の現状を整理したところ、人口減少、女性の活躍、価値観、対外関係の4つのトピックが南伊勢町の現状の大枠を形作っていること、またそれぞれの要因が複雑に絡み合っていることがわかった。もちろん、南伊勢町でも男女共同参画は着実に進んでいる。2021年には女性の副町長が誕生しており、町役場には二人の女性課長がいる。また、教育・福祉の分野で活躍する女性は大勢おり、企業経営者にも活躍している女性たちはいる。この事実は、インタビューを通して実感した。

しかし、より多くの南伊勢町の女性が活躍するのを阻んでいるものは何か。インタビュー結果を統合して見えてきたのは、「異なる属性」の人たちとの交流が少ないということだ。「属性」というのも、主に「世代」と「地域」[iii]である。南伊勢では、同世代及び同じ地域内でのコミュニケーションは活発だ。私たちが南伊勢町に滞在した数日間中も、すれ違うと挨拶をしてくれる人はたくさんいた。これは、地域内のコミュニケーションが強い現れだと言える。しかし、「属性」間の交流は極めて少ない。これは、南伊勢町の産業形態から見ても自然なことである。南伊勢町の主要産業は第一次及び第二次産業であり、最も人の交流が促進される第三次産業は活発ではない。しかし、人や社会が変化していくためには、「新しいもの」や「外」のものに触れることが必要だ。そうしなければ、変化のきっかけすらつかむことができない。

冒頭で述べた４つのトピックも全て「属性間の交流が少ない」ことを中心に互いに関係している。人口減少は、若者という新しい風を吹き込む力を弱らせ、既存の価値観を硬直化させる。それは、対外関係を深く持たなくても良い産業形態によって強化され、女性の活躍を阻んでいると分析した。

2. 課題の分析

第1節での分析を踏まえ、南伊勢町の情報伝達及びコミュニティ、すなわちネットワークの問題に着目し、その解決を通じて「南伊勢町の良い伝統を残し」「少しずつでも南伊勢町を変えていくことにつながる」「実現可能な策」を提案したいと考えた。

情報の流通は、南伊勢町における大きな課題である。第一に、トップからボトムへの情報や価値権の伝達がうまくいっていない。育休その他の子育て支援策の存在についてクチコミを通じて初めて知る市民がいることは、役場による情報発信が住民や事業者に十分届いていないことを意味する[iv]。「広報みなみいせ」の情報もすべての町民に届いているわけではないことは、インタビューの結果からも明らかである。第二に、横のつながりによる情報の流通が不足している。町内で先進的な取組を行い成功した女性がいる（＝ロールモデルが存在する）にも関わらず、それに続こうとする人は少ない。各産業の先進的な取組も、他の町民には十分伝わっていないと推測される。縦横双方の情報流通に問題があるのが、南伊勢町の情報流通における大きな課題である。

コミュニティの問題も大きい。南伊勢町の既存コミュニティは「強いネットワーク」であり、内部の交流が充実している一方で、新たな考えを導入しコミュニティ自体のあり方を変えていくことは不得手である。そのため、南伊勢町ではコミュニティが硬直化し、女性や若手が活躍しやすくなるような新たな価値観が浸透しにくいものと考えられる。コミュニティの維持の観点でも大きな課題がある。高齢化が進む中で既存のコミュニティの活動は縮小を余儀なくされている。人口が少ないため、若い世代や女性に向けたコミュニティも不足している。世代間の対立が生じた例もある。南伊勢町のコミュニティは、硬直化と量的縮小という2つの課題に向き合う必要性がある。

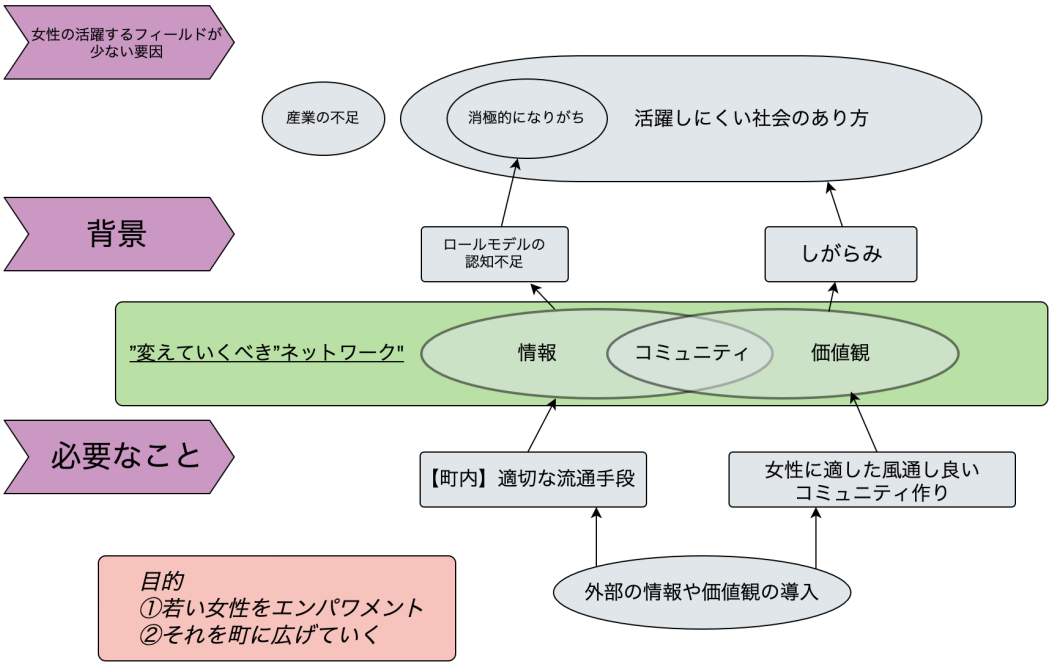

図4. 課題の背景と必要な対策

現在の南伊勢町には、女性が活躍するフィールドが少ない。なぜなら、社会の「しがらみ」（＝近代以降に確立した性別役割分業観）のため女性の積極的な活動が阻まれ、その結果女性が活躍するロールモデルが周囲に少ないことで、そのほかの女性も町内での自身の活躍について消極的になるからだ。南伊勢町に女性が活躍するフィールドを創出するには、この背景にあるネットワークの特徴、つまり多様な情報が共有されにくく伝統的な価値観が強いコミュニティを変えていくことが必要なのだ。外部からの情報や価値観を積極的に取り入れた上で、それらが共有・理解されるような、風通しの良いコミュニティを作ることが求められる。南伊勢町のコミュニティを「若い女性をエンパワーメントする」ものに変えていくことができれば、それは他の女性、そして町全体に広がっていき、伝統を重んじつつも活力のある地域を作っていくことができるだろう。

[iii] 旧南勢町と南島町では産業構造が異なり距離もあるため、交流が乏しい。

Ⅲ. 提言

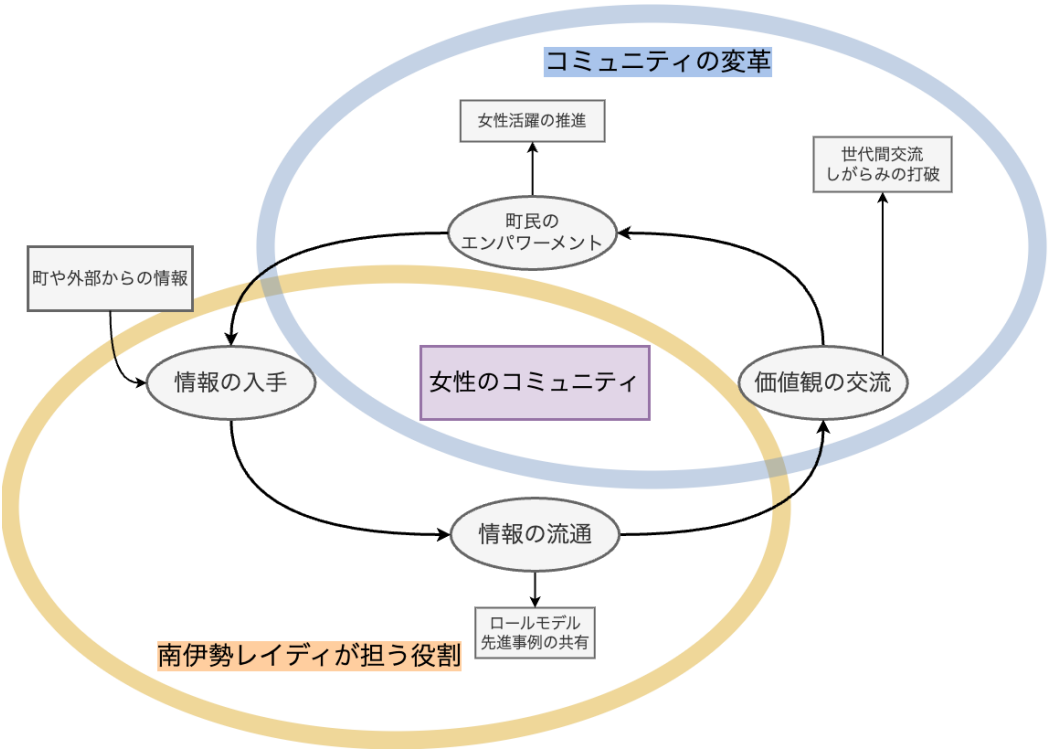

図5. 本提言が想定する効果

南伊勢町のコミュニティを「若い女性をエンパワーメントする」ものに変えていくことが、南伊勢町の活性化には不可欠である。そこで、私たちは「南伊勢レイディシップ Ladyship-女性が創出する南伊勢の未来-」を提言する。これは、一定の研修を受けた南伊勢町の女性を「南伊勢レイディ」に任命し、南伊勢町の情報を収集、クチコミや「井戸端会議」等の多様な手段で町民に情報を発信・共有するものである。

1. 背景

南伊勢町の産業の活性化には「多様な情報が共有されにくく、しがらみが存在するコミュニティ」を「多様な情報や価値観が共有される、風通しがよく女性が集いやすいもの」へと変革し、女性が活躍できるフィールドを増加させることが必要である。そして、私たちは情報の流通とコミュニティの改善に着目した。

インタビュー結果から、南伊勢町における「情報の流通」のカギを握るのは「クチコミ」であることを認識した。クチコミは世代に関係なく情報を共有する手段として有効である反面、その情報の量や質は一般に保障されない。「クチコミを通じて町の取り組みなどを知る例がある」と伺ったことから、私たちは特にクチコミの量と質の改善を図ることが、既存のネットワークを活用する観点からも南伊勢町における情報の流通の改善として効果的であると考えた。

コミュニティの改善の観点では、まずはアクティブな女性のさらなる活躍を促し、それを通じてロールモデルを多くの町民に提供、結果として町全体を緩やかに変えていくアプローチが有効だと考えた。南伊勢町の人々の新たなことに取り組むモチベーションは千差万別である。その中で、女性をエンパワーメントするコミュニティを作るという視点に立った時、まずはモチベーションの高い人を刺激し、新たなネットワークを形成、その波及効果や新たな価値観を広く町民に提供することを狙うこととした。

主題のLadyshipは、英語で「貴婦人」を意味する、高貴な雰囲気の単語である。また、その響きはLeadershipを連想させる。このことから、女性が南伊勢町の社会で尊重され、重要な役割を担っていくことを目指す本提言にふさわしいと考えた。副題については、本施策が女性をエンパワーメントする社会を作り、南伊勢の未来を明るくしていくことを願いつけたものである。

	町	南伊勢レイディ
すること	南伊勢レイディの研修と認定 南伊勢レイディへの情報提供 南伊勢レイディの居場所の維持	情報の入手・取材 情報の発信 町民との交流「井戸端会議」
コスト	南伊勢レイディの活動上生じた経費の手当 研修実施に伴う費用 井戸端会議施設管理費用	時間 労力
インセンティブ	町の施策の効果的告知 女性の活躍を通じた町全体のモチベーションアップ 住民サービスの補完	スキルアップと自己実現 女性向けコミュニティ

表2.町及び南伊勢レイディの取り組みの概要

2.町が実施すること

町は①南伊勢レイディの研修と認定、②南伊勢レイディへの情報提供、③南伊勢レイディの居場所となる「井戸端会議」開催場所の維持の3つを行う。

①の研修と認定では、町内のモチベーションが高い女性に対して南伊勢町の概況や町の政策、主要な事業者の取り組み、女性が活躍できる社会に必要なこと、効果的な情報の収集と拡散の手法などを伝える。町外の人を講師とするのも有効だろう。そして研修を終えた女性を、南伊勢町が「南伊勢レイディ」に任命する。なお、最初の南伊勢レイディ（5名程度）の任命にあたっては、既存のコミュニティを活用し円滑なキックオフを図る観点から、アクティブな女性が多い商工会女性部などに所属する女性にオファーを行う。

②南伊勢レイディへの情報提供では、継続的に研修を行い技能の維持向上を図るのはもちろん、町の施策や町内の事業所の取り組みなどを南伊勢レイディに伝達する。これにより、南伊勢レイディは継続的に活動を行い、南伊勢町に新たな情報を共有しつづけることができるだろう。

③「井戸端会議」の場所としては、町内の空き店舗（や、定休日の店舗）を活用することを想定する。南伊勢町民にとって「守りたい」場所を残し活用する点においても有効である。

行政はこれらの取り組みを行うにあたって、次のコストを負担する。

- 研修の実施にかかる費用
- 南伊勢レイディの活動に対する手当て
- 取材にかかる費用や、施設滞在時相当の給料など。
  - 施設滞在時の給料は、時給1100円×3時間を想定。
- 「井戸端会議」の場の維持費用

南伊勢町が本施策を行う最大のメリットは、女性の活躍を通じて町全体のモチベーションアップを図っていけることにある。女性が活躍するフィールドの存在は、女性人口の流出を抑制するだろう。モチベーションにあふれた町民のロールモデルが町内で広く共有されることにより、町全体で新たなことに取り組む風土が生まれ、産業の活性化につながる。そのほか、町の施策や情報を安価かつ効果的に住民に伝えることができる点も町にとっては魅力となるだろう。

3.南伊勢レイディが実施すること

南伊勢レイディは、①情報の入手・取材、②情報の発信を主な活動とする。その中で、③町民との交流を図っていく。

①情報の入手・取材に関しては、町から提供された情報や、自分で発見した事柄に基づき、南伊勢町で積極的に活動をしている事業者や個人に対して取材を行う。なお、取材の際の手法などについては、南伊勢レイディ研修で学んだものを活用する。

②情報の発信に関しては、①で得た情報を主にクチコミで広げていく。取材したコンテンツについては町が収集し、場合によっては広報誌や動画などでのPRにも利用するなど、さまざまな手段を通じて正しい形で情報が町内に広がるよう伝え方を工夫する。知人を通じた町外への広報の役割も担えるだろう。

③町民との交流を図り、「クチコミ」を着実に機能させるため、南伊勢レイディは週1回数時間程度、町内の空き施設に滞在し「井戸端会議」を行う。様々な世代の町民が集い交流できる井戸端会議において、南伊勢レイディは積極的に情報を発信し、南伊勢町のコミュニティに新たな情報や価値観を伝達していく。また、町民からの声を聞いたり

質問に答えたりする役割も期待できる。これにより町役場の役割を一部補佐できるだろう。

南伊勢レイディとしての活動は、南伊勢レイディの女性に多くのメリットをもたらす。第一に、女性は研修や南伊勢レイディでの活動を通じてスキルアップを図るとともに、自身の能力を町のために生かすことを通じて自己実現につなげていくことができる。活動の中で町民に感謝される、あるいは議論などに参加する機会も増えるものと想定され、その結果、南伊勢レイディの女性は「自らが地域において（男性と同じように）重要な役割を担う人材である」という認識と自信を持つだろう。また、モチベーションの高い女性が集う南伊勢レイディのコミュニティは、特に現在町内のコミュニティが不足している現役世代の女性にとって居心地のよいものとなるだろう。

4. 期待される効果と将来像

本施策による南伊勢町における情報流通のネットワーク、特にクチコミの質と量の改善は、町や事業者の先進的取り組み、及び新たな価値観の町内への共有を促進し、コミュニティの風通しをよくすることにつながる。南伊勢レイディの女性は自分自身が「活躍する女性」のロールモデルとなるほか、女性をエンパワーメントする取り組み、また先進的な女性活躍のロールモデルを町全体に共有することで、町のコミュニティに「女性が活躍する」価値観を浸透させていくこともできるだろう。南伊勢レイディを務める女性が増えることも考えられる。南伊勢レイディの経験から自信をつけた女性が、他の分野でも活躍して町内のリーダー的役割を担うようになれば最善である。また、南伊勢レイディが作り出したネットワークを通じて、町民間で異なる価値観の交換が行われることも期待できる。伝統的に存在する世代間・性別ごとの価値観の相違に起因する「しがらみ」を解きほぐし、世代間の対立の緩和にも貢献するだろう。

加えて副次的効果として、南伊勢レイディ経由の情報提供を通じて、町の住民サービスを補完する役割を担えることが挙げられる。財政難の中で支所を削減することになったとしても、住民のサポートは南伊勢レイディによりある程度行えるだろう。南伊勢レイディは自ら南伊勢町の様々な面に触れ、その魅力を再発見することにより町への誇りや自信を高めるだろう。そしてその誇りや自信は、南伊勢レイディを見た他の町民にも広まっていくだろう。

おわりに

私たちは、「南伊勢町の産業の活性化」に向き合うに当たって、事前の調査に基づき女性の活躍がカギを握るのではないかと仮説を立てた。仮説に基づき現地で行ったインタビューからは、人口減少・価値観・女性の活躍・対外という南伊勢町の現状を形作る4つの特徴を見いだすことができた。その背景にあるのは、属性が異なる人々の交流が少ないことであった。私たちは、この問題に対してクチコミなどを活用した情報の流通とコミュニティの充実を図り、町内のネットワークを改善することで南伊勢町に存在する「しがらみ」を解きほぐすため、「南伊勢レイディシップ Ladyship」を提案した。南伊勢レイディは、クチコミなどによる町民との交流、すなわちネットワークの形成を通じて、女性をエンパワーメントする社会を南伊勢に作っていくだろう。私たちの提言は、直ちに南伊勢の産業を活性化するものではない。しかし着実に南伊勢の女性の活躍を促し、その波及効果により南伊勢町全体に活力をもたらすものである。この提言が南伊勢の人々が守りたいと思うものを守ること、そして南伊勢の人々の積極的な取り組みの促進に貢献することを期待したい。

参考文献

井上 岳一 ”地域づくり、まずは「女性目線」から～男性優位の地方創生は機能不全～”日本総研 2020年3月1日 https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=36715（最終アクセス：2022年10月31日）。

国立歴史民俗博物館 監修 「性差の日本史」展示プロジェクト 編 （2021）『新書版 性差の日本史』集英社インターナショナル。

NHK ”東京へ移る女性その理由は？“地方への潮流”カギは女性に”2022年2月25日 https://www.nhk.or.jp/politics/articles/feature/78130.html（最終アクセス：2022年10月31日）。

総務省統計局.令和2年国勢調査。

総務省統計局.平成27年国勢調査。

三重県.”令和２年国勢調査 人口速報集計結果（三重県分） ”令和2年10月1日. https://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000962996.pdf（最終アクセス：2022年10月31日）。

三重県戦略企画部統計課 ”2019 統計でみる三重のすがた”平成31年3月。http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000887250.pdf(最終アクセス：2022年10月31日)。

南伊勢町.”男女別行政区別人口”令和4年8月2日。https://www.town.minamiise.lg.jp/material/files/group/23/20220731.pdf (最終アクセス：2022年10月31日リンク切れ)。

南伊勢町”南伊勢町における女性職員の活躍の推進に関する特定事業主行動計画”.令和3年4月 https://www.town.minamiise.lg.jp/material/files/group/2/joseikatuyakusuisinn_R3.pdf (最終アクセス：2022年10月31日)。

南伊勢町”南伊勢町の給与・定員管理などについて” https://www.town.minamiise.lg.jp/material/files/group/20/21kyuyo.pdf(最終アクセス：2022年10月31日)。